

寧古塔紀略満洲語の破裂音・破擦音の音質(1)

—資料の整理—

吉池孝一

1. はじめに

吉池孝一(2021)「現代満洲語口語の破裂音と破擦音の音質について」において、現代の満洲語口語の破裂音と破擦音には、音質として、閉鎖が強い強音(tense)と閉鎖が弱い弱音(lax)や、声の有無や、気音の有無が認められるけれども、話し手と聞き手は、気音の有無によって音の弁別をしており、発音器官の緊張の有無や、声の有無は、余剰であるとみて特段の不都合はないとした。現代の満洲語口語にあつては、そのようであるとして、過去の満洲語口語ではどのようなであったか、ということが気になるところである。そこで、これ以降数回にわたって、17世紀の『寧古塔紀略』(呉振臣著。1721年頃成書)に含まれる漢字で音写された満洲語(文語ではなく口語であることは動詞語尾から判明する)を検討することにより、古満洲語口語の破裂音と破擦音の音質がどのようなであったか、ということについて考えてみる。

今回は、まず『寧古塔紀略』の漢字音写満洲語という資料の質について検討し、次いで漢字音写満洲語と現代満洲語口語とを対応させた資料を作り、破裂音と破擦音の対応について確認をする。整理した資料に基づいて、古満洲語の破裂音と破擦音の音質を検討することについては、次回以降におこなうこととする。

2. 呉振臣の漢語音と満洲語音

17世紀の満洲語口語の破裂音と破擦音の音質を、『寧古塔紀略』所収の漢字音写満洲語によって検討するにあたり、著者呉振臣が使用した漢語音はどのような性質のものか、また満洲語はどのような性質のものか、ということについて確認をしておかなければならない。

『寧古塔紀略』所収の満洲語を研究した竹越孝(1998)によると、著者呉振臣は、江蘇呉江出身の父呉兆騫の流刑地である寧古塔(黒竜江寧安県)で康熙三年(1664年)^①に生まれ、18年後の1681年に父の故郷江蘇呉江に帰郷し、60歳の頃(康熙六十年・1721)寧古塔での生活を回想してつづった『寧古塔紀略』を公にしたということがわかる。また竹越孝(1998)は、呉振臣の二歳ごろの様子を、父呉兆騫が故郷の母親に知らせた書信を紹介する。それによると、呉振臣が呉江の漢語方言を話し、漢語の官話(役人の言葉)や満洲語をも習得していく様子をうかがい知ることができる^②。家庭内の言語は呉語の呉江方言であるが、18歳ま

^① 本文冒頭に「甲辰十月十四日寅時生予」とある。姜維公・劉立強(2014)『東北辺疆卷八 柳辺紀略 龍沙紀略 寧古塔紀略』所収の「寧古塔紀略」139頁による。

^② 「蘇(呉振臣の幼名)はとても聰明であり、すでに詩經の數句を読むことができます。も

で寧古塔におり、そこで使用された官話(役人の言葉)および満洲語を習得したわけである。その後、江蘇呉江に帰って42年間を過ごし『寧古塔紀略』を書いたから、江蘇呉江の漢語方言および呉方言地域一帯の読書音にも通じていたはずである。

なお、『寧古塔紀略』によると、寧古塔は内城と外城からなり、漢人は外城の東西の2門の外に住んでいたことがわかる。呉氏の家は初め東門の外にあったが、その後、漢人はみな城中に移され、呉氏は西門の内側に移ったとある^③。この記述から、漢人が集まって暮らしていた地域、すなわち漢人コミュニティが存在していたということがわかる。父親の呉兆騫は同じ境遇の文人たちと詩社を結成するなどしたというから、子の呉振臣も寧古塔の漢人社会の中で育ち、その漢語に触れたはずである。呉振臣が触れ習得した漢人社会の言語がどのようなものであったか確かなことはわからない。江南からの流刑者が一箇所に集まっており、そこで江南の共通語が話された、という可能性を否定することはできないが、そのような可能性を証する記述があるわけではない。そうであるからには、呉振臣が参加した漢人社会では北方に通用していた北京官話のようなものが話されており、それを習得した、と想定するのが穏当なところであろう。以上は漢語について知り得ることである。もう一つの言語である満洲語であるが、この満洲語は、呉振臣が“中国人の立場”で習い覚えた満洲語としてよいのであろう。17世紀後半(1664~1681)の寧古塔(黒龍江寧安県あたり)の満洲語ということになるが、その満洲語が、満洲語口語であるのか、満洲語文語であるのか、ここまで確認した生活の経緯の記述だけから判断をすることはできない。

3. 旧寧古塔一帯の満洲語と現代満洲語方言

呉振臣が寧古塔(黒龍江寧安県あたり)で習得した満洲語が文語であるのか口語であるのか或いはその両者であるのかということと、『寧古塔紀略』に使用された満洲語が文語であるのか口語であるのか、ということは別の問題であるが、われわれが知ることができるのは『寧古塔紀略』に掲載された満洲語の質のみである。竹越孝(1998)は、『寧古塔紀略』に掲載された満洲語の動詞の終止形語尾が、文語形の-mbiではなく、口語形の-məであることから口語に基づくとする。本稿もこれにしたがう。

さて、寧古塔一帯の満洲語口語はどのようなものであったか。現代方言を参考にすること

ともとは呉江の言葉を話していたのですが、(近頃では)官話や満洲語も片言ながら話します。いつも、はやく(呉江に)帰って、はは様【ばば様】に会いたいと言っております。」(蘇還甚聰明，已能讀詩經四五句矣。原說吳江鄉談，官說及滿洲話也說幾句，常叫道快回去見親娘。)『歸來草堂尺牘』所収「上母親書」。漢語は竹越孝(1998)からの引用。

^③ 「(寧古塔城)の周囲は八里、全部で四つ門がある。南門は江に面しており、漢人は各々東西両門の外に住んでいる。我が家は東門の外にあり、……。後に、呉三桂の反逆への対応により、兵を転任させ(城中に)空きが生じたので、漢人はすべて城中に移された。我が家も西門の内に移り住んだ。」(周八里，共四門，南門臨江，漢人各居東西兩門之外。予家在東門外，……。後因吳三桂造逆，調兵一空，令漢人俱徙入城中，予家因移住西門内。)姜維公・劉立強(2014)『東北辺疆卷 八 柳辺紀略 龍沙紀略 寧古塔紀略』所収の「寧古塔紀略」139頁による。

ができるならば最善であるが、寡聞にして寧古塔一帯の現代満洲語方言の事情について知らない。しかし参考になる記述はある。愛新覚羅烏拉熙春(1992)の2頁によると現代満洲語の口語には四種あるという。すなわち「京旗満洲語」(北京の知識人に代々受け継がれた満洲語。すでに人数が少なく方言を形成し得ないという)、「黒龍江満洲語」(黒龍江沿岸地域の満洲語)、「嫩江満洲語」(嫩江沿岸地域の満洲語)、それに「伊犁満洲語」(新疆伊犁地方の錫伯族の満洲語)である。黒龍江満洲語と嫩江満洲語は、ともに清の康熙初年に、黒龍江一帯の防備に当たらせるため徴収した寧古塔(現在の黒龍江省の南東、牡丹江中流あたりに位置する)と吉林一帯の満洲人の後裔であり、その言語は比較的近いという。吉池が目にし得た黒龍江省の調査資料は、清格爾泰(1982)の黒龍江省富裕県三家子屯(嫩江沿岸)のもの、趙傑(1989)の黒龍江省泰来県大興(嫩江沿岸)のもの、愛新覚羅烏拉熙春(1992)の黒龍江省孫呉県四季屯(黒龍江沿岸)と黒龍江省富裕県の三家子屯(嫩江沿岸)のものであり、いずれも、地域的にみれば、黒龍江満洲語と嫩江満洲語に相当するわけである。これらの調査報告によると、三名の調査者は、破裂音と破擦音は息の有無によって対立するとみていることは明らかである。この点については、『KOTONOHA』第228号掲載の吉池孝一(2021)で言及した。もっとも、300年前の寧古塔一帯の満洲語口語の音質を、現代の黒龍江満洲語と嫩江満洲語から無批判に推測することはできないが参考とはなる。

4. 『寧古塔紀略』執筆の経緯と利用した漢語音

呉振臣は、『寧古塔紀略』の満洲語口語を漢字音で音写するわけであるが、自己の言語に無い音を習得するのは困難であることは、われわれのような、破裂音と破擦音に清濁の対立を持つ日本語話者が、無声無気音と無声有気音という気音の対立を持つ北京語を習い覚える際に経験するところでもある。北京語の無声有気音に日本語の清音に当て、北京語の無声無気音に日本語の濁音を当てて発音を試みるのであるが、ダメ出しの連続であった。現在のように音声の観察が進み教学法も整えられていても、自己の言語に無い音の習得は困難である。ましてや呉振臣の時代においては、第二言語として満洲語口語音を正確に習得するのは困難であったであろう。学習の過程を想像するならば、呉氏が本来持っていた言語の音韻上の区別に当てはめて、第二の言語である満洲語音の区別を聞き覚えるというのがふつうのありかたである。呉氏の第一の言語は漢語とみてよいから、それがどのような漢語であったかを明らかにすることは、まずもって重要な事柄である。

さきに述べたように、呉振臣の幼少時の家庭内の言語は呉語の呉江方言であるが、18歳まで寧古塔におり、そこで使用されていた北方の官話(役人の言葉)、および満洲語口語をも習得した。家庭内の言語である呉江方言と北方官話の使用頻度がどのようなものであるかということは、本稿のテーマにとって重要であるが詳細はわからない。その後、江蘇呉江に帰り、そこで42年間を過ごし『寧古塔紀略』を書いたわけであるから、江蘇呉江一帯の文人が使用する読書音にも通じていたはずである。言語の経歴はなかなか複雑であるが、『寧古塔紀略』執筆の経緯について次のようにある。

今年齡六十に近づき、髭と頭髮は次第に白くなった。苦難の時を振り返って思うに、ただ時を隔てたということばかりではない。時がたち忘れてしまうというのは誠に恐ろしいことで、子孫は、祖父がどれほどの苦難を体験したかをふたたび知ることはない。【そこで本年の】長夏（六月に相当）には、特段の用事も無かったので、これ【寧古塔で体験した苦難の経緯など】を紙に書きつけ『寧古塔紀略』とした。時に康熙六十年辛丑の年（1721年）七月のことである^④。

江蘇吳江にあって、満洲語口語の漢字音写を『寧古塔紀略』に記す時に、何を参照して音訳漢字を選択したかということが最大の問題である。次のように、いくつかの場合を想定することができる。①紙に記録して残しておいた漢字音写満洲語を利用した。この場合、わざわざ吳江の方言音が反映した漢字音を用いることは想定しにくい。北方の官話による漢字音に依ったとするのが穏当である。①のように紙の上ではなく、脳中に記憶として記録していた満洲語口語を引き出して利用したという場合もある。この場合、②満洲語口語の音形をそのまま自己の聴覚印象にしたがって記憶する場合と、③一旦漢字音に置き代えて文字と音を結び付けて記憶する場合が考えられる。③の場合は①と同様に北方の官話による漢字音に依ったとするのが穏当であろう。問題は②である。家庭内の言語である吳江方言をどの程度使用していたかによって、吳江方言音に同化させて記憶したか、あるいは北方の官話音に同化させて記憶したかが決まるわけであるが、詳細はわからない。

いずれにしても吳江の方言音の破裂音と破擦音には、例えば[t][tʰ][d]（現代吳方言の濁音の音質からみて[d]は有声の息を伴った[dʰ]であったかもしれない）のように三項の対立があり、当時の北方の官話音には[t][tʰ]というように二項の対立があったから、吳振臣は比較的幅のひろい選択肢をもっていたことになる。

①②③のいずれを利用するにしても、『寧古塔紀略』という書物は、主には江南の読書人を対象として書かれたものであろうから、江南の読書人に誤解を与えないように、最終的には音訳漢字に訂正を施して収めたと考えてよい。

以上、音訳漢字の選択における考え方を長々と述べたが、考え方を整理しておくことは事実の理解に欠かせないと考えるからである。それでは、次節において『寧古塔紀略』の満洲語の破裂音と破擦音を示す音訳漢字を整理する。

5. 『寧古塔紀略』満洲語の音訳漢字

『寧古塔紀略』の満洲語の破裂音と破擦音がどのような二項（無声と有声、有気と無気、硬音と軟音など）によって区別されていたかについて、著者の吳振臣は何も述べないので、吳振臣が満洲語を表記するために使用した音訳漢字によって様子をうかがうしかない。音

^④ 「今年近六旬，鬚髮漸白，回思患難時，不啻隔世，誠恐久而遺忘，子孫不復知祖父之閱歷艱危如此，長夏無事，筆之於紙，以爲寧古塔紀略。時康熙六十年辛丑歲七月也。」。竹越孝(1998)の引用文および姜維公・劉立強(2014:152)による。句読は後者による。

訳漢字の検討にあたって、竹越孝(1998)によって整理された資料が既にあるので利用する。それは、漢語と漢字音写満洲語、それに対応する満洲語文語と錫伯語(山本謙吾 1969)を対応させたものである。そこから、①破裂音と破擦音を含む語彙のみを抜き出し、②山本謙吾(1969)の錫伯語の音韻表記を音声表記に置き換え、③新たに清格爾泰(1982)の黒龍江省富裕県三家子屯(嫩江沿岸)の満洲語を付すという三つの新たな作業をして表を作ると下にまとめた表1となる。この表の見方は次のとおりである。

- ・「食吾(百)」の食吾は『寧古塔紀略』にある漢字音写満洲語、(百)は『寧古塔紀略』にある漢語。次いで満洲語文語のローマ字翻字、山本謙吾(1969)所収の錫伯語の音声、清格爾泰(1982)所収の三家子屯方言の音声の順に横に配置する。
- ・単語内の破裂音と破擦音により、単語を満洲語文語のローマ字表記 t, c, k, b, d, j, g の順に縦に配置する。
- ・満洲語文語の b と対立する p を持つ語は、『寧古塔紀略』に出現しないので、次に挙げる資料に p はなく t から始まる。
- ・対応する破裂音と破擦音には下線を付す。
- ・「生男、濟頒即哈、juí banjiha」の、j と b ように、一語の中に複数の検討すべき音の候補があるばあい、複数の箇所に重複して同一の単語を出す。この例の場合だと、見出しの b と、見出しの j の下に、この語を重複して出す。
- ・「必帖黒呼辣米(讀書)」の必帖黒(書)呼辣米(讀)のように、二語からなるものは、山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)から対応する語を引用するばあい、「bitx3'(本), bitku(書)」のように「,」の前後に一語ずつ並列して記す。したがって、一語として提示される漢字音写満洲語と、二語として提示する山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)とでは、意味に異なりが生ずる。
- ・複数の語形があるものは、tumən~tumun のように「~」を用いて記す。
- ・【】は、吉池による注記であり、動詞の活用形を記す^⑤。
- ・清格爾泰(1982)は、gabɬume (gab, t'w, me の三音節から成る) のように、ストレスのある音節 tu に、ストレスを表わす記号「'」を付して t'w とする。しかしながら次の表1では、二例を除き、その他は全てストレス記号「'」を削除して収める。

■満洲語文語 t, c, k に相当する音を含む語を順にあげる

t

『寧古塔紀略』 漢字音写満洲語(漢語)	満洲語文語	山本謙吾(1969) 錫伯語	清格爾泰(1982) 三家子屯
食吾(百)	tanggū	taŋ	taŋ~taŋŋʁ
喀不他米(射箭)	gabɬambi【現在形】	gaftəm	gabɬume

⑤ 満洲語の動詞活用形の用語は津曲敏郎(2002)による。

鴉他庫(火連)	yatarakū	無し	無し
突(坐)	t <u>e</u> 【命令形】	tɜm(坐る)	ti:ʋa(坐了)
土墨(萬)	t <u>u</u> men	tumən~tumun	tumun
托(火)	t <u>u</u> wa	tɔ̃a'	tua:
必帖黒呼辣米(讀書)	bithe hūlambi【現在形】	bitɜ3'(本), xɔlam(読む)	bitkw(書), xɔlambe(me)(讀)
必帖黒(書)	bithe	bitɜ3'	bitkw

c

温嗟蜜(賣)	uncambi	ʔuntɕam	untɕa:me
姑促(朋友)	gucu	gutɕw	gu:tɕo
衣扯(新)	ice	ʔitɕ3'	itɕi
曷赤克(叔)	ecike	無し	u:tɕkw

k

洼喀(不是)	waka	vaq ⁴	va:ɬxa
曷赤克(叔)	ecike	無し	u:tɕkw
目克(水)	muke	mukɜ3'~muku'	mukuo~muko
色克(貂皮)	seke	無し	無し
衣而哈目克(果物名)	ilkamuke	無し	無し
封枯(手帕)	fungku	fupkw	fupko
阿庫(無)	akū	ʔagw	a:ɬxu
該辣庫(不要)	gairakū	無し	無し
鴉他庫(火連)	yatarakū	無し	無し
阿而吃惡米(吃燒酒)	ark <i>i</i> omi【命令形】	ʔærjkj(燒酎), ʔæmim(飲む)	æ:rke~æ:rjke(酒), ɔ:mime(喝)
又不哈(箸)	sabka	safq	sa:pɬxa
甲工(八)	jakūn	dzaqɔn	dzaɬxɔn

■満洲語文語 b, d, j, g に相当する音を含む語を順にあげる

b

『寧古塔紀略』	満洲語文語	山本謙吾(1969)	清格爾泰(1982)
漢字音写満洲語(漢語)		錫伯語	三家子屯
拜央(富)	bayan	ba(j)in(金持)	bajin~ba:jin

濟頌卽哈(生男) ^⑥	jui <u>banjiha</u> 【過去形】	dʒi' (子, 息子), <u>bandʒim</u> ~ <u>baŋdzəm</u> (生む)	dzu:zɿ (孩子, 兒子), <u>bandzimbe</u> (産生)
昂邦阿馬(大伯)	amba ama	ʔambu' (大きい), ʔam(父)	amba: (大), a:mʌ(父)
昂邦(大)	amba	ʔambu'	amba:
百黑(墨)	behe	bɜyɜ'	bu:gu~bu:yu
鰲烘(土)	boihon	bʰioɕɔn~bʰioɕɔn	bʰioɕɔn
不打者夫(吃飯)	buda jefu 【命令形】	bəda' (飯), dzɜm(食べる)	buda: (飯), dzɜvɜ(吃罷)
喀不他米(射箭)	gab <u>tambi</u> 【現在形】	gaftəm	gab <u>t</u> ume
又不哈(箸)	sabka	safq	s'a:p ⁴ xa
鴉波(走)	yabu 【命令形】	javəm(去る, あるく)	ja:bme~javume
畢(有)	bi 【現在形】	bi'	bi:
必帖黑呼辣米(讀書)	bithe hūlambi 【現在形】	bitxɜ' (本), xɔlam(読む)	bitku(書), xɔlambe(me) (讀)
必帖黑(書)	bithe	bitxɜ'	bitku
d			
烏打蜜(買)	udambi 【現在形】	ʔudar xɔda' (買値) のʔudar(買う~)	uda:me
不打者夫(吃飯)	buda jefu 【命令形】	bəda' (飯), dzɜm(食べる)	buda: (飯), dzɜvɜ(吃罷)

⑥ 姜維公・劉立強(2014:145)は「甥」とし竹越孝(1998)は「生男」する。満洲語の漢字音写の形からみるかぎり、動詞+目的語の「生男」が正しい。

文語の jui であるが、胡增益(1994)の『新満漢大詞典』は jui の意味として①孩子(こども)と②兒子(むすこ)を挙げる。例文を見ると、「zhui banzhihabi 生孩子(子を産んだのだ)」とある。福田昆之(1987)の『満洲語文語辞典』の jui には「子、子供」とのみあり、banjimbi の項目を見ると用例として「haha jui banjiha 男子を生んだ」(満洲実録からの用例)を挙げる。これらの用例を見るかぎり、「生男(男子を生む)」という表現としては haha(男)に相当する語を付したほうがよさそうである。そうであるならば、濟頌卽哈 jui(子)banjiha(生んだ)は「子を産んだ」としかならないので、文語の haha(男) jui(子)の haha(男)に相当する語である「哈哈(男人)」を付して「哈哈濟頌卽哈」とすべきであるところ「濟頌卽哈」と記してしまったのかもしれない。

清格爾泰(1982)の三家子屯の方言には、文語 jui の複数形 juse に対応する語形の dzu:zɿ(孩子, 兒子)のみが挙げられている。単数‘相当’の jui に対応する語形の有無についてはこの資料だけからは確かなことはわからない。なお、bandzimbe(産生)の-mbe は文語的な表現のようにみえる。

呀打(窮)	yad <u>ah</u> ūn	jad <u>x</u> ən ^⑦	jad <u>Λ</u> ʊn
惡而訶打(人參)	or <u>hoda</u>	無し	無し
那打(七)	na <u>d</u> an	na <u>d</u> ən	na: <u>d</u> ʌn
得多蜜(睡)	de <u>dumbi</u> 【現在形】	du <u>d</u> um	du <u>d</u> ume(躺)
多(弟)	de <u>o</u>	du'	duu
對音(四)	du <u>i</u> n	du <u>j</u> in	dy:'n
法拖(袋)	fa <u>du</u>	fa <u>d</u>	無し
j			
孫查(五)	su <u>n</u> ja	su <u>n</u> d <u>z</u> a'	su <u>n</u> d <u>z</u> a':
壯(十)	ju <u>w</u> an	dz <u>ū</u> an	dz <u>u</u> an
不打者夫(吃飯)	buda <u>j</u> efu 【命令形】	bə <u>d</u> a' (飯), dz <u>ɜ</u> m(食べる)	buda:(飯), dz <u>u</u> wu(吃罷)
烟立者夫(吃肉)	yali <u>j</u> efu 【命令形】	jə <u>l</u> j dz <u>ɜ</u> m(食べる)	je:le(肉), dz <u>u</u> wu(吃罷)
朱(來)	<u>j</u> io 【命令形】	d <u>ʒ</u> im(来る)	dz <u>u</u> :~dz <u>u</u> u(来)
朱(二)	ju <u>w</u> e	dz <u>u</u> '	dz <u>u</u> u:
哈哈朱子(小厮)	haha <u>j</u> use	xə <u>ʒ</u> əd <u>ʒ</u> (男の子, むすこ)	*xə: <u>ʒ</u> əd <u>z</u> e:(兒子) ^⑧
又而漢朱子(丫頭)	sargan <u>j</u> use	sə <u>ʒ</u> ənd <u>ʒ</u> (娘, 少女)	*sə: <u>ʒ</u> ənd <u>z</u> e:(姑娘) ^⑨
濟(子)	<u>j</u> ui	d <u>ʒ</u> i' (子, 息子)	*dz <u>u</u> :zɪ(孩子, 兒子) ^⑩
又而漢濟(女)	sargan <u>j</u> ui(女兒)	sə <u>ʒ</u> ənd <u>ʒ</u> (娘, 少女)	sə: <u>ʒ</u> ənd <u>z</u> e:(姑娘)
濟頒卽哈(生男)	<u>j</u> ui ban <u>j</u> iha 【過去形】	d <u>ʒ</u> i' (子, 息子), ban <u>d</u> ɜim ~ban <u>d</u> zəm(生む)	dz <u>u</u> :zɪ(姦子, 兒子), ban <u>d</u> zɪmbe(産生)
濟哈(錢)	<u>j</u> iha	d <u>ʒ</u> i <u>ʒ</u> a' (おかね, 銅貨)	dz <u>i</u> ʒa:
卽喀(錢) ^⑪	<u>j</u> iha	d <u>ʒ</u> i <u>ʒ</u> a' (おかね, 銅貨)	dz <u>i</u> ʒa:

⑦ 山本謙吾(1969:46)には[yadɣən]とあるが誤植とみて[jadɣən]とする。

⑧ dʒ と dze:は満洲語文語の単数‘相当’の jui に対応する。小厮とは意味がずれる。

⑨ dʒ と dze:は満洲語文語の単数‘相当’の jui に対応する。丫頭とは意味がずれる。

⑩ dʒi' は満洲語文語の単数‘相当’の jui に、dzu:zɪ は満洲語文語の複数の juse に対応する。

⑪ 錢は重複しているように見えるが、そうではないであろう。胡增益(1994)の『新満漢大詞典』は zhiha(=jiha)に、銅錢の計量単位である「文」の意味があることを挙げる。例文に、ilan(三) zhiha(文) saire(価値を持つ) zhiha(銅錢)「三文の価値を持つ銅錢」とあり、二種の zhiha(=jiha)を用いる。濟哈と卽喀はこの二種の jiha に相当するものであろう。『寧古塔紀略』をみると、濟哈は「金曰愛星，銀曰蒙吾，錢曰濟哈，水曰目克，…」というつながりで出てくる。金や銀とともにあるから、金や銀のように価値のある物すなわち銅錢(あ

阿卽格(小)	ajige	ʔadʒɪg	aidʒig
甲工(八)	jakūn	dzaqɔn	dza ⁹ xɔn
g			
該蜜(要)	gaimbi【現在形】	ɟiamə	ɟaime
該辣庫(不要)	gairakū	無し	無し
格格(姉)	gege	gɟyɟʔ	gu:gu
阿卽格(小)	ajige	ʔadʒɪg	aidʒig
根唎蜜(去)	genembi【現在形】	gɟnəm	gu:nm(去罷)
畏根(夫)	eigen	ji'yən	wigien~wiɟien
阿哥(等輩彼此稱呼)	age	ʔaɟɟʔ	a:ɟ
姑促(朋友)	gucu	gutsɥ	gu:tʂo
又而漢濟(女)	sargan jui	sagəndʒ(娘, 少女)	sa:ɟandze:(姑娘)
又而漢(妻)	sargan	sagən	sarɟan
又而漢朱子(丫頭)	sargan juse	sagəndʒ(娘, 少女)	*sa:ɟandze:(姑娘) ^⑫
喀不他米(射箭)	gabtambi【現在形】	ɟaftəm	ɟabtume
銘牙(千)	minggan	miŋan	miŋpa:
佞我(六)	ninggun	niŋun~niɟun	niɟun~ niɟun~niɟun
蒙吾(銀)	menggun	mɟun~muɟun	muɟun
貪吾(百)	tanggū	taŋ	taŋ~taɟɟ

表 1. 破裂音・破擦音を含む語の対応

【】で示した動詞の活用形には、現在形が多いけれども、過去形や命令形もあり整理はされていない。これは、整理された満洲語文語の語彙集を手元に置き参考にしたかもしれないが、それをそのまま口語にあてはめたのではなく、生活の中で使用した満洲語口語を、著者の呉振臣がそのまま記録したものが残っていてそれに依ったか、もしくは生活の中で使用した満洲語口語をそのまま記憶しており、それに依ったため、整理がなされていないとみて大過はないであろう。

るいは単に錢)を指す語と理解することができる。卽喀のほうは「買日烏打蜜, 賣日温嗟蜜, 両日央, 錢日卽喀。一曰曷術, 二曰朱, 三曰衣朗, …」というつながりで出てくる。売買に関する語および数字とともにあるから、錢を数える単位を指す語と理解することができる。おそらく呉氏は両者を同音異義語と認識して意図的に異なる音訳漢字を用いて音写し、漢語の「錢」にも貨幣と重量単位の二種の意味があるので、二種の音写に対して一種の錢という漢語を与えたため、重複のようにみえる語彙の提示となったのであろう。

⑫ dʒ と dze:は満洲語文語の‘単数’相当の jui に対応する。丫頭とは意味がずれる。

6. 満洲語文語と山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)の対応

前節表1の破裂音・破擦音を含む語の対応に依り、満洲語文語と山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)の対応をみると次のとおりである。

満洲語文語	山本謙吾(1969)	清格爾泰(1982)
t	t	t
c	tʃ	tʃ, tɕ(iの前)
k	k, q	k, q
b	b, f, v(母音間)	b, p, v(母音間)
d	d	d
j	dʒ, dʒ(非円唇の狭母音の前)	dʒ, dʒ(非円唇の狭母音の前)
g	g, ɣ ɣとɸ(ともに母音間) ŋ(ŋの後)	g, ɣ ɣとɸ(ともに母音間), ŋ(ŋの後)

表2. 破裂音・破擦音の対応

()の前の音は、()内に記した条件による音声的な異音として理解することができる。それ以外は、ほぼ満洲語文語の t, c, k と b, d, j, g に、山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)の [t, tʃ, k, q] と [b, d, dʒ, g, ɣ] が対応する。山本謙吾(1969)の [p, t, tʃ, k, q] と [b, d, dʒ, g, ɣ] は、当該書の「満洲口語の音韻の体系と構造」^⑬において、[p, t, tʃ, k, q] は強音であり厳密には [p', t', tʃ', k', q' ~ p, t, tʃ, k, q] で、無声有気音が主であるが条件によって^⑭無声無気音になるとする。[b, d, dʒ, g, ɣ] は弱音であり厳密には [b̥, d̥, dʒ̥, ɡ̥, ɕ̥ ~ b, d, dʒ, g, ɣ] で、半有声の無気音が主であり条件によって^⑮完全な有声の無気音になるとする^⑯。清格爾泰(1982)の p, t, tʃ, k, q と b, d, dʒ, g, ɣ は、実用的な

⑬ 服部四郎・山本謙吾(1956)を収録したもの。

⑭ [bait'] (仕事, 事柄, 事件) → [bait-aqw'] (大丈夫, 危険なし, 用なし) や [fiaqw'] (はだか) → [fiaqw-om] (はだかになる) のように、複合語として母音始まりの語が後続する場合、有気音の [t'] や [qw'] が無気音の [t] や [qw] となる。

⑮ [vadən] (ポケット) や [vadzəm] (終る) のように、有声音に挟まれた場合、完全な有声音の [d] となる。この例の場合の有声音は、母音であるが、m などの有声音の鼻子音でもよい。

⑯ 当該書の有気音と半有声音の表記には問題がある。「満洲口語の音韻の体系と構造」の「1.1.1.1 強音と弱音」および「1.1.2 破擦音音素」において、無声有気音の例として [p'amp'] (綿入れの長い上着) [t'at'əm] (ひっぱる) [k'aləm] (支える) [surk'] [surkwk'] (糸まき) [q'a'] (せきとめる!) [faq'ər] (ズボン) や半有声無気音の例として [t'ob̥səm] (丁度) [d̥a'] (根本; 尋) [x̥aɕ] (峯) [q̥ava'] (おこげ) [q̥əgə'] (美人) [p̥adziq̥] (小さい) [q̥al] (手, 腕) [q̥əm] (取る) [q̥aŋgardi'] (二番目の g の下には(◦)とあるが省略した) (想像上の猛禽) をあげるが、「満洲口語の音韻の体系と構造」中の他の箇所では、何の説明もなく、有気の記号 ['] と半有声の記号 [̥] を用いない音声記号を出す。当該書のもととなった服部四郎・山本謙吾(1956)においても同様である。なぜ有気と半有声の記号を用いないのか、その意図(方針)について、推測するこ

ローマ字表記であり、このローマ字表記に対する音声の説明では、前者を無声有気音の [p', t', tʂ', k', q'] とし、後者を半有声無気音の [b, ɖ, ɖʂ, ɡ, ɣ] とする。したがって、満洲語文語と、現代満洲語方言の山本謙吾(1969)と清格爾泰(1982)との対応は、“ほぼ”一致しており、次のようになる。

満洲語文語	現代満洲語口語 (山本謙吾 1969 と清格爾泰 1982) の厳密な表記
t	t'
c	tʂ'
k	k', q'
b	b̥
d	ɖ
j	ɖʂ
g	ɡ, ɣ

“ほぼ”一致するとしたのは、次のように表 2 から抜き出すと、満洲語文語の b に対して、山本謙吾(1969)の f や清格爾泰(1982)の p のように、わずかであるが例外もあるからである。

満洲語文語	山本謙吾(1969)	清格爾泰(1982)
b	b, f, v(母音間)	b, p, v(母音間)

この満洲語文語と現代満洲語口語との不一致は、どのようにして起こるかということについて、説明することができるか、或いは説明することができないかということを経験的に議論しなければならない。このことについては、次回に検討することとする。

参考文献 (発行年順)

- 服部四郎・山本謙吾(1956)「満洲語口語の音韻の体系と構造」『言語研究』30:1-29。『服部四郎論文集 3 アルタイ諸言語の研究Ⅲ』(1-55, 東京:三省堂, 1989年) 所載による。
- 清格爾泰(1982)「満語口語語音」『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』。(1998)『清格爾泰民族研究文集』232-355, 北京:民族出版社。
- 福田昆之(1987)『満洲語文語辞典』横浜市:F L L 発行。

とはできるが、やはり明瞭に説明する必要はある。33 頁以降の基礎語彙集においては、有気の記号[']と半有声の記号[.]は原則として用いない。[gal] (手, 腕)や[ɣaŋɣardi'] (想像上の猛禽)のように[.]が散見されるのは誤植の類であろう。「満洲口語の音韻の体系と構造」中の [p'amp'] [t'at'əm] [k'aləm] [surk'] [surkw'] [q'a'] [faq'ər] [t'oɣsəm] [ɖa'] [xɑɖ] [ɣava'] [ɣʒɣʒ'] [ʔadʒiɣ] [ɕəm] [ɕaŋɣardi'] を、基礎語彙集では [pamp] [tatəm] [kaləm] (つかえる) [surk] [surkw] [qa] (語彙集は qam) [faqər] [tob] (ピッタリ) [da'] [xɑɖ] [gava'] [ɣʒɣʒ'] [ʔadʒiɣ] [gal] [ɕəm] と記すため、結果として両者の音声表記が異なることになる。やはり何らかの説明が欲しいところである。

- 趙 傑(1989)『現代満語研究』北京：民族出版社。
- 愛新覺羅 烏拉熙春(1992)『満洲語語音研究』京都：玄文社。
- 胡增益 主編(1994)『新満漢大詞典』烏魯木齊：新疆人民出版社。
- 竹越孝(1998)「『寧古塔紀略』に見られる漢字音写満洲語語彙」『鹿大史学』45、1-19 頁。
- 津曲敏郎(2002)『満洲語入門 20 講』東京：大学書林。
- 姜維公、劉立強(2014)『東北辺疆卷 八 柳辺紀略 龍沙紀略 寧古塔紀略』中国辺疆研究文庫
哈爾濱：黒龍江教育出版社。
- 吉池孝一(2018)「女真文字談義 (5) —現代満州語口語の二項対立子音、アルタイ諸語の s
の音質など—」『KOTONOHA』第 185 号(2018 年 4 月)、1-10 頁。
- 吉池孝一(2021)「現代満洲語口語の破裂音と破擦音の音質について」『KOTONOHA』第 228 号
(2021 年 11 月)、20-31 頁。